



シュパルタ教育

シュパルタ教育と言っても、どれくらいの人に分かるだろうか。

●2009年は、縁あって、モンテッソーリ教育、シュタイナー教育を受けていらっしやる方の悩みや不安を実際に聞く機会を頂きましたので、その御礼の意味も含めて、

その不安や悩みの原因と解決策と修正方法と必要な覚悟を記録しておきます。

※公的な支援がない中で、子供のために少しでもいい教育をと思って苦心されている方達で意識の高い方々ですので、少しでも実質的な参考になればと思います。

●家庭内ですべき事と家庭外ですべき事が混在していたり、これらの事が、本来の場所ではなされていないときに無理無駄が生じ、本来の成長プログラムに誤差が生じる。修正できればいいが、その修正には莫大な時間と労力を要する。そもそも、原因に気づかない場合が多いので修正できずに肝心の

思考の臨界期を越えてしまう。

※下記は清書前のメモです。対象は0歳〜12歳

●家庭内ですべき事

家庭内ですべき事は、感味力の保持・育成です。自分(心)を育てることが出来る環境設定がメインです。自分という小宇宙を感じ味わうことです。「慌てず・騒がず・穏やかに」が基本です。ここを他(家庭外)に求めては、本来、他ですべき事(環境適応練習)が出来なくなります。家庭内での、モンテやシュタイナー的子育ては結構ですが、幼稚園など家庭外で求めるべきことではありません。「モンテやシュタイナー的子育て」をするのであれば、子供をよく見て、部分的に家庭内でのみ取り入れるだけにすることが理想的です。詳しい理由は、

次の項目を読まれば分かると思います。

※モンテッソーリの教育法とは(引用)
<http://www4.airnet.ne.jp/mitch/omocha/monte.html> ㊦

1:子ども

子どものあるがままの姿、子どもの意志・興味を中心に考える。どの子もある一定の期間自分の内面に特別の興味、こだわりが芽生える。モンテッソーリはこのひとりひとり異なる興味を大切に考え、園の子どもは自ら望む活動を選び、納得のいくまで繰り返すことができる。このある特定の時期に芽生える特別な興味を、モンテッソーリは「敏感期」と呼び、この敏感期を逃すとその後その能力を獲得するのに、大変な労力を要さなければならなくなる、という。たとえば、線の上を歩くことに執着を示す





子どもは、「平衡感覚」を養う大切な敏感期を迎えているのである。とことん「線上歩き」の仕事が本人が納得するまでさせることがモンテッソーリの考えなのである。

2：環境

モンテッソーリ式教育を行う園は「子どもの家」などと言われ、子どもは特別に考案された教材を使うことによって自分自信を教育するのである。すなわち、各々の敏感期を迎えた子どもにふさわしい、シンプルな教材が用意されているのである。これら教具を使ってそれぞれが活動に取り組み、園では遊びの時間とは言わず、「お仕事」と呼び、特徴は体の感覚を磨く、日常生活の訓練が中心であるということ。月齢があがるにつれ、数や言語についての知的発達を刺激する教材なども工夫されている。

3：教師

モンテッソーリの求める教師は、いわゆる普通の命令指導型の教師ではなく、子どもの活動を背後から見守り必要とされる時に手助けをする、助手のような役割である。無理強いをせず、強制的に活動に参加させたり時間で活動を区切ってその子の取り組んでいる課題を取り上げるようなことはし

ない。といっても子どもが收拾のつかない事態に陥らないよう、常に気を配って大声で叱ったり怒鳴ったりといったことをせずまとめあげていく、非常に高度な態度が要求されている。そのために、どの国にも特別にモンテッソーリ教師を養成するコースでトレーニングを積んだ者だけが教師になれるのである。

■これらの説明でも分かるように、全ては家庭内で出来ることであり、家庭内でこそすべきことばかりである。そして、家庭内ですれば、特別な手法（非常に高度な態度が要求されている。そのために、どの国にも特別にモンテッソーリ教師を養成するコースでトレーニングを積んだ者だけが教師になれる）をマスターする必要など一切ない。子供を丁寧に見て感じて接すればいいだけのことである。この家庭内での正常な状態を実現できない場合にのみ、緊急回避的に必要とされることは考えられるが、それは、子供にとっては不幸なことである。モンテソーリについては理論的な破綻が随所に見られまので、詳しくは下記アドレスをご覧ください。モンテッソーリの著書に関する、私のコメントを掲載しています。

<http://homepage.mac.com/donguriclu>

b/monte.html

●家庭外ですべき事は下記の2種類に区別されます。

- 一、自然環境の中ですべき事
- 二、人為的環境の中ですべき事

●自然環境の中ですべき事

自然環境の中ですべき事は、自然の中で「自主的に遊ぶこと」です。この遊びの中で自然環境を通して、自然環境に適応して生存していけるだけの反射を蓄積します。また、思考という最終進化形態に成長するために必要な基本思考回路も身につけます。自然を相手にした体の制御力が大事です。力強さではなくバランスが大事になります。人為的に用意された「お仕事」ではなく、自然の中での発見や感動を伴った「外遊び」が大事なのです。

この自然の中での自主的な遊びの代わりになる物（環境）は人工的には用意できません。情報量が全く異なります。「幼稚園で、遊んできたから」では、全く足りません。学力の土台となることですので、十分に考えて頂きたいと思います。子供は、遊ぶのが仕事というのは本音なのです。でも、



「お仕事」は「遊び」にはなりません。対自然（自然現象）だから、自然のリズム、動き、正常な基本反射形成ができるのです。人為的な時間（編集された時間）は、できるだけ感じさせないことが、正常な進化を促すのです。このこと（自然の時間の流れを狂わしてしまう）が、テレビゲームなどの害の核心の一つです。

●人為的環境の中ですべき事

人為的環境の中ですべき事は、「独り立ちした時に、人間という社会環境に適應できるようになっていくこと（段階的に準備をしておくこと）」と「視考力を活用した、人間的な判断力を含む思考力養成」です。

本来なら、どちらも集団の場である学校で出来ることですが、教育界は教育が担うべき目的を見失っているのが現状ですので、すべきでないことをさせていることが多いようです。そこで、学校の本来の役割を家庭学習で、無理なく無駄なく効果的に出来るようにしているのが「どんぐり問題」です。

「独り立ちした時に、人間という社会環境に適應できるようにしていること（段階

的に準備をしておくこと）」とは、様々な人間を第二の自然環境と考えると分かりやすいでしょう。雑菌が普通に存在する自然界の中で生活してゆくのには、無菌状態を子供に与えるのは、無謀と言うよりも環境適應できない子供を育てていることに他なりません。生活の場も同じです。家庭内では家庭でのコントロールがききますので別ですが、家庭外では、様々な人間という環境をコントロールすることは出来ません。ですから、その環境に適應できるように準備することが、子育て・教育の一環となります。この、様々な人間への適應準備を無視して、特殊な環境設定をしてしまうと「普通の生活環境」で生きていけなくなります。具体的には、就学时（小学校に入学するとき）の環境に適應できる様な準備はしておくべきだと言っています。

ただし、それは、学習面のことではなく対人間面でのことです。就学前に「計算や文字」の練習などしている暇はないのです。

また、実際に就学する小学校の現状とかけ離れている集団生活を選ぶことは百害あって一利なしということになります。12歳以前に、家庭（保護者）がコントロールできない場所に送り込むことが分かっている

のならば、そこでの耐性を持たせて送り込むことが家庭（保護者）の責任となります。もちろん、思っていたことと異なる些細な違いはあるでしょうが、それくらいは工夫して乗り切ることが出来ます。しかしながら、知っておきながら、全く準備をさせないで、突然今まで経験したことのない環境に適應させるのは難しいことです。保護者は小学校を経験していますので環境の違いは分かるはずですし、環境が悪化していることもご存じでしょう。でしたら、バランスを考えながら、人間形成に悪影響を及ぼさない範囲で「準備」をしておく必要がありますし、責任もあります。

集団遊びを通して、就学後のスムーズな学校生活を送るためにも、特別な目標（特に知育目標）を掲げていない「0歳児からの保育園生活」は十分効果的でしょう。

「視考力を活用した、人間的な判断力を含む思考力養成」は、学力養成ですから、学校の役割です（全小学校で「どんぐり問題」を使用すれば簡単にできます）が、現在は難しいようですので、次のようにします。

【つづく】



●あとかぎ●なるべく知育を取り入れていない、外遊びをゆっくり見守っていてくれる保育時間の長い保育園（幼稚園ではなく）：6才〜12才に子供が置かれる外的環境に、人間としての成長を疎外しない範囲で、無理なく慣れることが出来る準備教育ができるところ。人間育ては家庭内で、環境適応準備は保育園です。これが反対になつては本末転倒なので上手くいかない。また、どちらか一方の教育だけでも片手落ちである。程良いバランスで、家庭内教育と家庭外教育は異なっている必要があるのだ。社会は家庭ではない。この大前提を無意識に無視して、その場しのぎ的な（先に続かない、続けるのが難しい）環境を作つてはいないか注意を払うべきです。カルチャーショックは当然なのに、何の準備もせずにショックを受けてパニックになっている方が多いようです。また、そのショックのことやショック対応の方法を示さないと保育や教育を引き受けているのは片手落ちであり実質的には正常に機能している教育現場ではないと思います。ショック対応をしないのであれば12才までを責任を持って教育できる状態を作るべきです。現状の日本では学校は難しいでしょうからホームスクールの完全

サポート体勢とセットでの教育がなければ意味がありません。